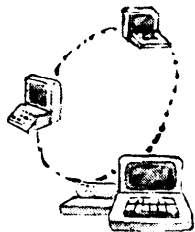
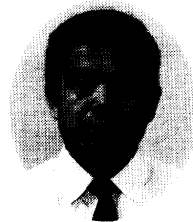


巻頭言



学会活動の国際化とネットワーク化

石田 晴 久†



本学会では1990年10月1日から5日にかけての期間に、創立30周年を記念して国際会議 Info-Japan '90 を催した。私はたまたまこの会議のプログラム委員長を勤めたが、論文の方は世界35カ国から応募があり、参加者も26カ国から1,300人あったから、関係者の気持ちとしてはこの会議は大成功だったといえる。

しかし内情を正直に言えば、当学会が初めてイニシアティブをとって開いたこの国際会議には、やはり無理なところもあった。まずは経費で、東京の一流ホテルでとなると非常に金がかかり、大学関係者からは高すぎるといわれた5万円の会費をとっても、企業からの多額の寄付が必要であった。

第2の無理は、参加者の大部分が日本人なのに、公用語が英語だったことである。これは本当に奇妙であったが、私にとってうれしい誤算だったのは、「日本人も英語がうまくなった」とおおむね好評だったことである。これは、とくに若い人の海外渡航が増えている、わが国社会の国際化が進んでいることの表れであろう。英語で書いてもらった論文の方も、スペル・チェックを使った人のものでは、スペルミスは当然少なかった。レーザープリンタによる印刷もきれいだった。これらはコンピュータ技術の進歩のおかげといえる。

さて、こうした会議のほかにも、本学会の規格調査委員会や国際委員会の仕事でも、最近では国際的な打合せがものすごく増えている。学会の中心の人達の国際活動は非常に盛んなのである。そこで問題となるのは、こうした国際化が直接それにタッチしていない一般会員にどんな意味をもつかである。費用の点からいえば、国際活動は会費以外の別会計から支出されているから、一般会員に負担をかけてはいないが、そのご利益を会員が直接感じることは少ないかもしれない。しかし長

い眼でみれば、とくに経済的にゆとりがあり、技術的にも進んでいるわが国は、外国とのつきあいで、それ相応の貢献が期待されているのだから、国際化の強化はやはり必要なのである。

もうひとつ今回の国際会議で、内外の関係者および参加者と連絡をとるのに、非常に便利で、これぞ不可欠という感じがしたのは、コンピュータ・ネットワークによる電子メールの交換である。私の場合、メールの経路は、東大・慶大・ハワイ大・アメリカのインターネット・ヨーロッパ他であった。このルートで、日本のJUNET/WIDEネットとインターネットは今や64 Kbpsの国際デジタル専用線によりTCP/IPプロトコルで結ばれているから、メールは即座に転送されるようになっている。相手さえすぐ応答してくれれば、連絡は非常に速くできるのである。

大規模な会議となると、チュートリアル講師、基調講演者、招待講演者、発表者、座長、査読者、プログラム委員など、連絡をとる必要のある人は山程いる。今回も経験したのは、郵便の手紙にはなかなか返事をくれない人が、電子メールだとすぐ応答してくれるということ、その点でもメールは不可欠になりつつあると実感した。

以上の経験から、ここでは学会に二つの提案をしておきたい。ひとつは、今後も増えるであろう国際会議に備えて、英語に強い人を置くなど、学会事務局内の国際化対応体制を整えることである。InfoJapan '90では事務局を外部に委託したが、経験の蓄積や経済性からいっても、学会自身で国際会議などを取りしきれるようにするのがよい。

もうひとつは、学会事務局をアカデミック・ネットワークの1ノードとし、電子メール(英文も含めて)交換を会員・事務局・外部の間で可能にすることである。これは1991年には可能にしたい。(平成2年11月27日)

† 本会副会長 東京大学大型計算機センター